

## 主 題：今年の通信簿

## 聖書箇所：詩篇 1 篇

今日は今年最後の日曜日ですが、日本人はどうしてもこのように年末になると、これまで過ごしたこの1年がどんな年だったのかを考え、そして、また来年、どのように生きて行こうとするのかと、そのように考える習性があるようで、私も例外ではありません。12月に入ってからのこの1年を振り返りながら、自分はどのように生き、またどのように生きて行くべきなのかということはずい分考えました。皆さんもきっと同じようなことをされているのではないかと思います。私たちはそのように振り返りながら、私たちが為してきた間違っただけの事柄を改め、より神に喜ばれるような人生を送って行くことができるように、新たな目標を立て、次の年も歩んで行こうと考えるのです。新年というのは不思議なもので、単に一日変わるだけなのに、なぜか、新しいスタートラインに立つような、そのような気持ちに私たちがさせるものです。そのことを考えて行く中で、私の心はこの詩篇1篇へと引かれて行きました。この1篇は私が最も好きな詩篇と言っても過言ではないのですが、非常に親しみ深い詩篇であり、何度も繰り返して学びをし、長い時間をこの1篇全体に費やした記憶があります。また、それだけでなく、何度かの機会にこの箇所からメッセージをしたこともあります。けれども、もう一度、この詩篇に帰って来て、1年を振り返りながらいろいろなことを考えながらこれを読んで行くときに、新しく幾つかのチャレンジを与えられたというか、このようなことを考えなければいけないということを思わされたのです。そして、この詩篇に対して新しい感謝、新しい思いを持つに至ったのです。皆さんもこの詩篇はよくご存じでしょう。今日も賛美の中で歌われました。また、皆さんはここから何度もメッセージを聞かれたことがあると思いますが、敢えて、今日はこの詩篇を選びました。そして、皆さんといっしょに、今日はタイトルにあるように、今年1年の成績を付けてみたいと思います。

幾つかの質問があります。そして、その質問に対して皆さんが「はい」と答えるのか、「いいえ」と答えるのかによって、皆さんにこの1年の成績をつけていただければと思います。私たちがこの1年を閉じるに当たって、毎週、私たち自身の人生をみことばを通して振り返り、私たちが本当に神が求めているような祝福に満ちた人間として生きて来たのかどうか、そのことを皆さんによく吟味していただきたいと思います。同時に、その答えが「YES」であっても「NO」であっても、皆さんの成績が良くても悪くても、来年、神がいのちをくださるとするならば、そのいのちをこのような主に祝福されている人物として生きて行くことができるように、そのことを皆さんといっしょに学ぶことができると願います。詩篇1篇はこのように歌っています。

- 1:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。  
 1:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。  
 1:3 その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。  
 1:4 悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。  
 1:5 それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。  
 1:6 まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

この詩篇は詩篇全体の序文として書かれている詩篇です。それゆえにこの詩篇は詩篇150篇すべての中にあっても、最も重要なものと言っても過言ではありません。詩篇2篇と合わせてこの詩篇は神を礼拝すること、その重要性、そのすばらしさ祝福を教え、あらゆる人々にその礼拝に参加するように呼びかける、そのような詩篇です。それゆえに、この詩篇の1篇1節と2篇12節には両方ともに「**幸いなことよ。**」と言っています。それはまるでサンドイッチされていかに、祝福に満ちた人物がどういふ人なのかということはこの1篇と2篇で私たちに教えてくれるのです。それがこの箇所での焦点になっています。それが強調点なのです。いったい、ここに教えられている祝福に満ちた人生とはどのような人生なのでしょう？私たちはいったいそれをどのようにして手に入れることができるのでしょうか？いったい、それをどのようにして保ち続けることができるのでしょうか？このように祝福に満ちているならば、私たちはいったいどのような人生を歩むことになるのでしょうか？これらの疑問に対する解答がこの詩篇を見て行くときに私たちに与えられるのです。

## ☆祝福に満ちた人生とは？

1:1は神に祝福された人物はどのような生き方をして行くのかを私たちに明確に教えてくれます。先ほど言いましたように、皆さんといっしょに幾つかの質問を考えて行きたいと思います。私たちがこ

の1年どのような生き方をして来たのか、そのことに皆さん一人ひとりが答えていただければと思います。あらかじめ、ご心配のないように言っておきますが、今日は詩篇1篇を見ますが、ほとんど1-3節の中で話をします。ですから、もう時間が無くなって来たのにまだ3節だと、そのように心配なされないでください。時間通りに終わろうとしていますから安心して聞いてください。そして、考えてください。どうぞ、YESかNOでお答えください。

**質問1**：あなたはこの1年、主にあって満足していましたか？

これが私たちに向けられる質問の1番目です。この質問は、別の言い方をすれば、いったいどのようにして私たちは主に祝福された、そのような人生を生きることができるのかという解答にもなっています。私たちはこの1年、2007年を見るとき、私たちの心はいつも満足していたでしょうか？詩篇の著者は言います。もし、私たちが主の前に敬虔な者であるなら満足に満ちた1年を送っていたはずだ、その答えはYESだと。1:1は直訳するとこのように始まります。「何と幸いな人だろう！」と、これは感嘆文です。そこにいるあの人、何と幸いなのだろう、祝福されているのだろう、幸福に満ちているのだろうと、そのようなことばが使われています。この「幸い」ということばは原文では複数形が使われていて、単に、一つの祝福があっただけでなく、満ち溢れんばかりの祝福がその人に上にあることを教えています。そして、何よりも重要なことは、この「幸い」、祝福というものがその人の感情や状況によって支配されているものではないということです。なぜなら、幸せだといっているのは私ではないのです。あの方は幸せだとだれか他の人が言っているのです。だから、私がどのような状況にいたとしても、私がそこでたとえ「いや、私は幸せではないのです」と思っている、それに関係なく私たちは幸いなのだと言っているのです。状況や感情に支配されない「幸せ」、それがここで教えられている「幸い」です。いったい、どのような「幸い」がそのような「幸い」なのでしょう？それは私たちが置かれている立場にあります。

いったい、なぜ、このような「幸い」が与えられているのか？それは、一言で言えば、神が私たちに溢れんばかりの祝福を与えてくださっているという事実に基いています。エペソ1:3を見てください。パウロはこのように告げています。「**私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。**」、どれ位の霊的祝福でしょう？「**神はキリストにおいて、天にある…いくつかの霊的祝福をもって、わずかの霊的祝福をもって…？**違います、「**すべての霊的祝福をもって私たちに祝福してください**」っていると言うのです。私たちは他の人から見て、羨まれるような立場に今置かれているのです。皆さんお気づきですか？神を信じ、神に受け入れられ、神の子どもとされたその瞬間から、神はどれ位の霊的祝福を私たちに与えてくださっているのか、皆さん、ご存じですか？パウロは言います。「**天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。**」と。父なる神は私たちに家族として受け入れてくださり、私たちの罪が赦され、イエス・キリストによって和解が成立し、神のものとされたその瞬間から、神は私たちにあらゆる祝福を与え続けてくださっているのです。皆さんはもしかすると、いいえ、そんなことはありません、私の人生はそんなにいいものではないのだと言われるかもしれません。しかし、神の祝福を考えたとき、皆さんがこの神によってどれだけ助けられ、どれだけ慰められ、どれだけいのちを与えられ、導かれ、生きて行くことができるのかを考えるなら、私たちは神に感謝せずにはおられません。もうすでに、何度もこのようなことは皆さんお聞きになったことがあるはずですが、私たちのあらゆる生活は神の最善の中にある、常に祝福へと導かれているということ、神は私たちの人生に最善しか行なわないことを。この間、私は詩篇23篇を読んでいました。奈良でそのメッセージをしましたが、その準備をしている中で再び思い起こされました。いつも私たちは「**緑の野にいていこいのみぎわで安らいでいる**」だけではないのです。神はどこへ連れて行かれますか？「**死の陰の谷を歩くことがあっても、**」と言います。でも、そのときでも私たちは「**わざわざを恐れませんが**」と言います。なぜなら、神が私たちとともにいてくださって、私たちに助け、私たちに導き、私たちがくじけるときに励まし、私たちがつまづくときに支え、私たちに新たないこいのみぎわへと導いてくださるからです。私たちはどのような状況の中にあっても喜びをもつことができます。なぜなら、神がともにいてくださるから、神がそこに祝福を与えてくださっていることを知っているからです。どのような状況にあっても、たとえば、何か足りないこの世が私たちに訴えたとしても、私たちはその中で喜びをもって満足をもって生きることができます。なぜなら、私たちは神をもっているから、神が私たちの神となられて私たちにあらゆる霊的祝福を備えてくださっているからです。

皆さん、不思議に思ったことはありませんか？私はこのことが非常に興味深いと思います。それは何かというと、聖書はみことばの中で一度たりとも私たちに「**幸せを求めなさい**」とは命じないのです。なぜでしょう？幸せを求めてもそこには幸せはないのです。この世で最もみじめな人はどのような人か

というと、それは幸せを追求している人です。こうすることによって私は幸せになるだろう、ああすれば私は幸せになるだろうと思って、物を追求し、人間関係を迫り、自分が考える幸せになるというあらゆるものを追い求めて行くのですが、結局、そこにたどり着いたとき幸せは待っているのでしょうか？待っていません。一時的な幸福はあるでしょう、一時的な達成感はあるかもしれませんが。でも、そこには真の幸福は待っていません。私たちがたどり着くのは再びの渴望の場です。満足の場所ではありません。一時的な満足を得てもそれはすぐに渇きへと変わります。なぜなら、幸せというのは、神を追い求めて行くときに副産物として生まれて来るものだからです。だから、聖書は「幸せを求めなさい」と言わないのです。だから、聖書は神を追い求めなさい、神に従って生きなさいと言います。神に従順に生きて行くときに、私たちは神からの祝福を溢れんばかりにいただくから、そこに私たちの本当の幸福があると。このように神を追い求めて行く人物は、神との関係がすばらしいものへと変えられていて、それゆえに、深い喜びと満足を心からもつことができるようになっていくから、どのような状況にあっても、あらゆる人たちがその人を見て「あの人は幸せだ」と、そのように言うのです。どうして、あんなに苦しい中であってあの人はあのように笑みを絶やさずに生きることができるのだろうか？皆さん、そのような生き方をこの1年されましたか？皆さんの周りの人たちは皆さんのことを「あの人は幸いな人だ」と言っていますか？神との関係が余りにも明らかであるゆえに、余りにもはっきりとそれが確立されているゆえに、そこに常に喜びと満足があり、確かに、足りなく、辛く悲しく涙するときがあるかもしれないけれど、その中であって心から湧き上がる満足がその人を満たしているゆえに、周りにいる皆さんの家族や友人たちが皆さんを見て「幸せだな」と、そのような生き方をされましたか？それとも、そうではありませんでしたか？皆さんの満足は神からやって来ましたか？それとも皆さんの満足は自分が成し遂げた一時的な実績のゆえにもたらされた満足でしたか？このような満足は神との正しい関係のうちにはしか見出すことはできません。神との和解というのは、イエス・キリストが為してくださった贖いのみわざによって確立されていなければ、このような祝福、このような満足は絶対に得ることはできません。それゆえに、先ず、聞かなければいけません。私は本当にそのように神との関係が確かなものとしてあるのかどうかを。それがあんなら、私はどうしてそのように生きることができなかつたのか、または、こんな生き方をすることができて何と感謝なことかと…。皆さんどうでしょう？YESですか？それともNOですか？

**質問2**：2007年、皆さんはこの世から決別して生きていましたか？

人生における満足は神と和解されたゆえに持つことができるものでした。神からの祝福が豊かに、溢れんばかりに与えられているという、その事実を目を向けるゆえに得ることができるものでしたが、同時に、詩篇の著者は1節で続けてこのように言います。「**悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。**」と。このような幸い、このような満足を得ることができる人物というのは、どのような生き方をしているのかということをお私たちに教えているのです。皆さん、よく覚えておいてください。幸せと罪は同居することはできません。心の中に罪が入って来ると幸せは心の中から出て行きます。心の中から罪が出て行くと幸せは心の中に戻って来ます。それゆえに、この二つには確実な分離、決別がなければいけないのです。そして、クリスチャンは天の御国に属する者として、この世の一部として歩むことを止めた者、そのような歩みをしなければいけないのです。だから、著者は「**悪者のはかりごとによらず**」歩む者は幸いではないということです。私たちは神からの祝福を「**罪人の道に**」立ちつつ得ることはできないのです。私たちは神が与えてくださる完全な満足や喜びを「**あざける者の座に**」着きながら得ることはできないのです。このようなすばらしい神にある満足を得るためには、私たちはこの世と決別していなければいけないのです。私たちはこのことをよく覚えておかなければいけません。私たちは不敬虔な者、神に喜ばれない生き方をしている人たちとともに歩くことも、彼らとともに立つことも、また、彼らのみわざに参加することもあってはならないのです。この世が信じている事柄を受け入れ、それらに買収され、彼らの行動を真似、彼らとつながることに喜びを見出すようになってはいけません。この詩篇はそのことを余りにもはっきりと教えます。私たちは神の前に正しい教えの道を歩まなければならないし、私たちは神に従順に従って行く義なる者たちとともに、彼らの行く道に立っていないと決別しなければならないし、神を心から崇める者たちの座に着いていなければいけないのです。

ここで、この著者が教えることは非常に重要なことです。私たちがいったいどのような友人をもっているのか、どのような助言を受けるべきなのか、いったい、どのようなことに皆さんが参加して行くのか、そのことがここで問われているのです。もう少し詳しくこの部分を見て行きましょう。質問はこうでした、「あなたはこの2007年、この世と決別して生きて来ましたか？」。どのようなことから決別しなければいけないのか、その詳細が出て来ます。三つあります。

○私たちが決別しなければいけないものとは？

## (1) 悪者の助言から身を避ける

まず、「**悪者のはかりごと**に歩まず」と言います。この「**はかりごと**」ということばは「助言」と訳すことができます。そして、「**悪者**」ということばは神が置かれている場所からだんだんと離れて行く、そのような姿を表わします。しっかりつかまっていけない人たちのことを指しています。「**はかりごと**」は「助言」であると言いましたが、いったい、どのようにこの人たちが生きて行こうとするのか、その歩みを決める様々な助言、教え、影響をすべて総括するようなものです。つまり、ここで言われていることは、神の前に正しく立っていない、悪の世界へと歩みを進めているそのような人たちが私たちに語りかける様々なことば、影響、そのようなことです。このような世的な考え方、悪者の助言というのは人間中心の考え方以外の何ものでもありません。なぜなら、彼らの考え方自体が神が定められているところから離れているからです。この世的な悪者の助言はあらゆるところからやって来ます。テレビで、学校の教室で、新聞で、映画で…、私たちはこの悪者の影響に取り囲まれて生きています。神の前に正しい選択をせず、むしろ、神に従わない方が何と幸せなのだろうという、そのような影響の中で私たちは生きています。この世は私たちに言います、どのように生きるべきなのかを、どのように考えるべきなのかを教えようとします、どのように物事を捉え、どのように自分の道を進んで行くべきなのかを私たちに教えようとしています。この世は私たちにどのようにして男女の交際をするべきなのかを教え、どのような相手と結婚するべきなのかを教えようとします。この世は私たちにどんな仕事を選ぶべきなのかを教えようとします。この世は私たちにどのように家族を導いて行くべきなのか、築き上げて行くべきなのかを教えようとします。そして、この世は私たちにどのような生き方を、どのような選択をするべきなのかをあらゆるところで教えようとします。

それに対して詩篇の著者は言います。神からの祝福を得る者はその助言のように歩まない、その助言を完全に拒絶すると。この世的な助言に私たちが心引かれて行くとき、その中に身を置いて行くとき、私たちは悪者によって導かれるようになります。そして、その行く先は滅びでしかありません。この悪者の助言を私たちが拒絶することをしなければ、私たちは神を自分の前から押し退け、自分中心の考え方をして生きるようになって行きます。私たちににとって必要な助言は神の助言です。それ以外に私たちに必要な助言はありません。私たちが聞かなければいけないこと、私たちが持たなければならない世界観は、このみことばを通して得るものでなければいけないのです。けれども、私たちは実際に聖書を学んでいるときでさえ、この世的な考え方は私たちに影響をもたらさないでしょうか？皆さん、聖書を読んでいて思ったことはないですか？いや、それは無理ですか、それは分かるけれども私の状況を考えてみてくださいとか、神がしてはいけないと言われることだと分かっているのに、そのプレッシャーに負けて神が望まない方へ進もうとしている自分に気付くこと、あらゆるところで私たちはその戦いをもっているのです。皆さん、そのときどうされていますか？皆さんはそこでこの世的な助言を拒絶し、神のみことばにしっかり留まって歩もうとしますか？それとも、それらを受け入れて「いいじゃないですか」と言っていますか？皆さんがこの世の声に耳を傾けて行くとき、皆さんの行く方向は明らかに決まって行きます。滅びへと向かっています。皆さんはこの戦いに気付いておられますか？このような影響が皆さんの周りにある事実を目を留めていますか？そして、皆さんはその声に耳を貸さないように自分の耳を塞いでいますか？むしろ、みことばの声に耳を傾けるように一生懸命みことばに目を向けていますか？皆さんが祝福に満ちた人生を歩むためには悪者の助言に耳を傾けてはいけません。

## (2) 神に喜ばれない者たちとの友情から離れる

あなたは離れていましたか？とそのことが聞かれています。多くの注解者はこの部分で詩篇の著者はだんだん下り坂を転がって行くと言います。どんどん酷くなって行くのです。悪者が罪人となり、罪人があざける者へと変わって行きます。初めは歩いていたのですが、立ち止まります、そして、終には座ってしまうのです。ここでもそのような過程を見ることができます。著者は言います、「**罪人の道に立たず**」と。一番簡単に皆さんが想像できるのはこうではないかと思いました。皆さん、タクシーを拾うときどうされますか？交通量の多い道端に立って車を見、空車という表示を見て手を上げます。そうするとタクシーが横に止まり、皆さんは乗り込みます。ここで言われていることは丁度そのようなことだと思ってください。道があります、罪人たちが通っている道です、そして、そこで罪人たちがやって来るのを私たちは待っていて、やって来ると手を上げ「いっしょに行きましょう！いっしょに行きますよ！」とするのです。この「**罪人**」ということばは「罪」ということばが原語になっています。それは「的を外す」という意味のことばです。つまり、神が定められた正しい枠、そこから外れた生き方をしている人たちです。彼らが歩んでいる道は神が定めた正しい道ではありません。悪者はそこから次第にずれて行く人たちですが、この罪人たちは明らかにそことは違うところを歩んでいる人たちです。悪者のことばに耳を傾け続けると、私たちはだんだんとその生き方が何とすばらしいのだろうと思うようになって来ます。影響を受けるから、そのような世界観をもって生きようになるから、考え方が神中心ではなく

自分中心になって行くからです。そして、罪人たちが羨ましくなるのです。あのような生き方を私もしたいと。この「立つ」というのは非常に意図的な行為です。歩いて来る罪人たちと一っしょに関わりをもちたいと願っているその姿が表わされています。別の言い方をすれば、これはいったいどのような人間関係の中に自分を置くのかということを言われているのです。ここで誤解していただきたいことは、皆さんがあらゆる未信者との友情を断ち切りなさいと言っているのではないということです。聖書はそのようなことを教えていません。事実、クリスチャンの中には「人々はイエスのことをあざける」と言いますが、イエスは「罪人たちの友であった」ということばが出て来ます。イエスは喜んで罪人たちのもとに行かれました。けれども、その理由は、罪人たちの生き方に憧れたからではなく、罪人たちに救いを教えるため、伝道するためです。罪人たちを救うためにイエスは出て行かれました。だから、そこで関わりを持つとしたのです。でも、ここで言っているのはそのような関わり方ではありません。その生き方に憧れ、その生き方に加わりたいと願う、そこに身を置くことに喜びを感じている、その人たちのことです。

パウロはIコリント5章でこのようなことを語っています。9節で「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。」とあり、そして、10節「それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。」と、パウロは「私は確かにあなたがたは分離しなければいけないと言ったけれど、それはこの世から出て行くということではない」と言っているのです。その通りです。私たちは彼らのもとに出て行って彼らのうちにあって神のすばらしさを伝える役割が与えられているからです。でも、聖書は私たちに分離しなさいと言います。この世から決別していなさいと言うのです。その交わりを楽しんではいけないと。イエスはヨハネの福音書でこのようなことを語っておられます。15：19「もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」、17：14では「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」と。さらに厳しいことをヤコブは私たちに言います。ヤコブの手紙4：4「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と。皆さん、この世と同じものであってはいけないのです。この世に同調しているものであってはいけないのです。この世と同じ事柄を求め同じ興味の中にあり、同じ関係を持つことを望んでいてはいけないのです。この世とクリスチャンの間には大きな溝がなければいけないのです。パウロは非常に厳しいことばでこのように言っています。Iコリント15：33「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。」、これは「良い道徳が」と訳すことができます。つまり、正しい生き方ができなくなると言っているのです。皆さんの友だちはどんな方ですか？皆さんは今だれと一っしょにいたいと思っておられますか？どのようなグループの中で生きることを望んでおられますか？神を愛する人たちですか？それとも神を愛さない人たちですか？皆さんは今どんなことをしたいと思っておられますか？神を愛する人たちがしようとしていることをしたいと願っていますか？それとも神を愛さない人たちがしようとしていることを心から願っていますか？皆さんは神を愛さない人たちが興味をもっていることに心奪われていますか？それとも神を愛する人たちが興味をもっていることに心を引かれていますか？聖書は私たちに言います、分離しなさいと。この世と同じであってはいけませんと。皆さんはだれと付き合いますか？皆さんはこの世とどのような付き合い方をしていますか？

### (3) 神に喜ばれない者たちの選択から離れる

この世が語ることに耳を傾け、罪人たちと同じものであると主張しようとするその人たちは、必然的に罪人たちの中に留まるようになります。彼らと同じところに座り、彼らと行動をともにし、彼らがする選択と同じ選択をするようになります。この「あざける者」というのは、単に罪を犯すだけでなく、神が語っている様々な事柄に対して、それを侮り馬鹿にし、それに逆らうことを喜びとする人たちです。だんだんと悪くなっています。最初は耳を傾けるだけでした。ああいいなあ、あんな生き方もあるのだ、ああ羨ましいなあ、あのように楽しくできて…、だから、一っしょにいたいなあとそのように思い続けて、終にはともに「あざける」選択をするようになるのです。皆さんの人生は神に喜ばれることを選択しようとする、そんな生き方ですか？それとも、それとは別の選択をしますか？

確かに、多くの事柄について私たちは毎日選択をしています。それらすべてが神に喜ばれるものでしょうか？皆さんがもし私に問いかけるなら、私の答えは残念ながらNOです。でも、私もまた皆さんも、悪者たちが、神に喜ばれないことを喜びとする人たちが選択するのと同じ選択をし続けるような生き方をしていないことです。この世的にはその方がうまく行くかもしれません。たまには、嘘をついたほうが良いと。先日、子どもの幼稚園で面談があったのですが、先生が言うのです。お宅のお子さんはいつ

もよく言うことを聞いて、たまには悪いことをすることも大切です、もう少し、羽目を外すことを学んでくれたらと、そのように言うのです。「いいえ」です。羽目を外さないことがすばらしいのではないですか？もし、そのように生きていくとするなら…。少し位の嘘はいいじゃないですか、少し位…と、世の中は私たちに助言します。罪人たちは私たちに誘います。そして、私たちはだんだんそれと同じ選択をするようになってしまうのです。皆さん、どうでしょう？そんな選択をしていませんか？皆さんのこの2007年の選択は神に喜ばれる選択の方が、喜ばれない選択よりも勝っていたと言えますか？

皆さん、この世から決別しておられましたか？詩篇の著者は言います。決別しなさい、別れていなければいけないと。もし、別れてなかったとするなら、皆さんはその決意をしなければいけません。神に喜ばれることをしようと。

**質問3**：皆さんはみことばに満たされて生きていたのでしょうか？

2節ではこのように言っています。「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。」と、何が教えられているのでしょうか？二つのことが言われています。

#### (1) みことば以上に喜びとするものは何もない

皆さんの喜びがどこにあるのかということが問われているのです。この世と離れていない人たちは悪者たちのことばに耳を傾け、彼らとの関係を望み、その選択をするようになって行きました。けれども、逆に、神に喜ばれる者たちはどこに喜びを見出すのでしょうか？このみことばに喜びを見出すのです。ここで言われている表現は、聖書の中にのみ喜びを見つかることができるという言い方をしています。神に祝された人というのは他に喜びを見出すことができないのです。いろいろな喜びを提供するものがあるかもしれませんが、この世は確かにここにも、あそこにも喜びがあると言うかもしれませんが、神の前に幸いを受けている人というのは、いいえ、違います、そこにはありません、ここにありますが、このみことばがその喜びを生み出すのだと言います。どうでしょう？もし、皆さんがこのみことばに喜びを見出しているなら、皆さんの人生は喜びのところにいきませんか？自分を楽ませることがあったら、皆さんはそこへ足早に出ていきませんか？たとえば、連続ドラマが好きなら間違いなくビデオのスイッチを入れて、逃さないようにと予約をします。なぜなら、それを見ることによって自分の心が楽しむことを知っているからです。皆さん、みことばに対してどうでしょう？毎日予約をしていますか？帰って来て必ず見ることができるようにと出かけるときに録画ボタンを押していますか？見逃したならレンタルビデオ屋へ行って借りて来ますか？そこまで熱心にこのみことばに喜びを見出そうとしますか？好きな劇があるかもしれませんが、好きな音楽があるかもしれませんが、そのために皆さんは多くのお金を投じて、多くの時間を費やして生活をされます。同じ位熱心にみことばに喜びを見出そうとされますか？皆さんの人生はみことばに満たされていますか？

#### (2) みことば以外のものが頭の中にあることはない

他のものは余り重要ではありません。だから、「**昼も夜もおしえを口ずさむ**」んでいるのです。ここで言われていることは、ずっと頭の中にみことばありますということです。この当時の人々にはそれが非常に大事でした。なぜなら、一人ひとりが聖書をもっていなかったからです。だから、彼らは月に一度、週に一度、集まったときにみことばが読まれたそれを繰り返し繰り返し頭の中で思い巡らしていたのです。忘れることがないように。私たちクリスチャンの人生はみことばに満たされている人生です。常に、神のみことばが自分たちを導く指針であるゆえに、祝福をもたらす方向を示すゆえに、私たちはみことばが中心になっている生き方をしているはずです。皆さんはこの1年、どのようにそのことを為して来られましたか？聖書の学びがあるという、朝からわくわくして一刻も早くその場に行きたいと思うような、そのような生き方を来しましたか？土曜日の晩、翌朝に聞くメッセージがどのようなものなのかという興奮に捉われて眠れないということはありませんか？この詩篇が紹介している人物はそのような人です。なぜなら、そこにだけ喜びがあるからです。

**質問4**：あなたは主のゆえに満ち溢れていますか？

3節を見てください。「その人は、水路のそばに植わった木のように。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」、2007年、皆さんは満ち溢れていましたか？単に、主にあつて満足していたのではない、単に世と分離していたのではない、単にみことばによって満たされていたのではない、実際に、すばらしさに満ち溢れていたと言います。

#### (1) 恵みに満ち溢れている

注目していただきたいところは「**植わった**」ということばです。これは植えられているのです。この木は勝手に育っていたのではなく、だれかがどこかに植えてくれた木です。もちろん、これは「木」ではなく、人物のことです。この人、神によって祝福を得ているその人は、神によって罪という荒野から取り出され、神の庭に植えられたのです。場所を見てください。単なる庭ではありません。日本語の聖書

では「水路のそばに」とあります。これは直訳すると、何本もの流れです。水に満ちた何本もの流れの横に置かれているのです。つまり、この木は成長するのに足りない要素が何一つないところに置かれているのです。どんな突風が来ても揺るぐことがないようにしっかり植えられ、どんなに乾燥が起こっても、どんなに日照りが続いても、この木には常に水が溢れんばかりに流れ続けているのです。何という祝福でしょう！何というすばらしい恵みでしょう！それが救われたときに神が皆さんに為してくださったことだと言うのです。こんなすばらしい祝福が与えられ続けているのです。これが皆さんに与えられている救いです。皆さんは自分の人生を見て、何と恵みに満ち溢れているのだろうという実感に基いてこの1年を過ごして来られましたか？それとも、神さま、もっと私に良くしてくださるといいのに…と書いていませんでしたか？詩篇の著者は教えます。すばらしいところに植えられている、欠けたものは何一つないのです。パウロは言いました。私が弱いときに神の恵みは私に十分であった、それゆえに、私は強いと。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。」（Ⅱコリント12：9）。

### （2）実りに満ち溢れている

「時が来ると実がなり、」と言います。このように豊かに恵みが与えられているから、当然のごとく、その木は成長し実が付くのです。神がすばらしいところに置いてくださって、神がその木をケアしてくださっているから実りをもつのです。スポルジョンという説教者はこんなすばらしい表現をしました。この「実り」とはこういうものだと思います。「神の前に本当に敬虔な人物は、苦しみのときに忍耐という実を実らせ、日々の困難のときに信仰という実を実らせ、繁栄のときに喜びという実を実らせる」と。皆さん、そんな実を身に付けておられましたか？著者が言っていることは「秋になったら実がなります」ではありません。春には春の実が実り、夏には夏の実が実り、秋には秋の実が実り、冬には冬の実が実る、1年中、実り豊かな木であるというのです。どのような実を付けるのでしょうか？ガラテヤ人への手紙に書かれています。5：22－23「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、5:23 柔和、自制です。」と、このような実を実らせていますか？皆さんの人生はこのように実り豊かなものはずです。2007年、どうでしたか？豊かに実っていましたか？

### （3）いのち豊かに溢れている

「その葉は枯れない。」と、決して枯れることがないのです。どんな熱風にさらされても、どんな冷たい風が吹き付けても、この木は常に緑の葉を茂らせていると。いつでも安定して常にすばらしい成長を遂げ続けているのです。別の言い方をすると、信仰のアップダウンがないのです。私たちはときに言いませんか？私の信仰は波のようです、ある時はすばらしいけれどある時は落ちていきますと。著者は言います。いつでも「いのち豊かである」ゆえに、いつでも緑豊かな葉を茂らせて、たくさん実って、恵みのうちに喜びを見出すと。どうして私たちはこのよう生きられないのでしょうか？神の恵みはこんなに豊かなのに、神の祝福はこんなにすばらしいのに…。あらゆるときに私たちは実を実らせて生きることができるのです。喜びをもって満足をもって生きることができるのです。霊的なアップダウンがあるのは私たちの信仰が弱いことの証明です。神の恵みに目を向け、神の力に信頼し、神のすばらしさをしっかり理解して行くとき、私たちは弱りようがありません。力強い神が横にいてくださるからです。

だから、著者は言います。「その人は、何をしても栄える。」と。ここで言っているのは肉体的な繁栄のことではなく、霊的な繁栄のことです。どんなことがあっても、神のすばらしさをしっかり知り、神のゆえに主にあって満足を見出し、この世と決別し、神のみことばに満ち溢れ、すばらしい祝福をしっかりと理解するゆえに、恵みと実りと、そして、いのちに溢れんばかりに満ちている、「その人は、何をしても栄える」のです。

皆さんの2007年の人生はそのような人生だったのでしょうか？今年を終わるに当たって、私たちは自分自身の人生をよく吟味しなければなりません。本当にこのいのちは神に祝福された生き方だったのかどうか、皆さんがこれらの質問にどのように答えられたのか私には分かりませんが、神はよくご存じです。来年、みこころなら神は私たちにいのちを与えてくださいます。また、同じテストが私たちの前に置かれています。今度は毎日の生活の中でこの四つの質問を思い出してください。神の前に正しく答えることができるのか、それが私たちクリスチャンに求められていることです。

まだ、神を信じておられない皆さん、この著者は非常に厳しい警告を皆さんにしています。4－6節にこのことがまとめて記されています。神を信じる人物はしっかり植えられている木であるのに対して、悪者は「もみがら」だと言います。イスラエルでは風の強い日に脱穀をしました。のみがらだけが飛んで行きます。それと同じように、神のさばきの座にあってそこに立ち続けることができず、滅びへと進んでいるのだと警告するのです。「幸いな人」になってください。皆さんにもその機会が与えられているのです。2008年、どのような年になるのか私たちには分かりません。でも、一つだけはっきりしていることがあります。クリスチャンの皆さん、皆さんは「幸いな人」です。なぜなら、神が溢れんばかり

の恵みを与えてくださっているからです。2007年、皆さんがどのように生きられたのか分かりません。けれども、確実なことは、神は皆さんに祝福を与え続けてくださり、皆さんは一生懸命それに応えて生きて来られたということです。感謝をもってこの1年を終わらしましょう。そして、来年、すばらしいさらなる祝福に期待をもちながら、神の前に従順に進んで行きましょう。